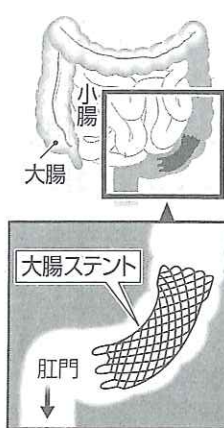


# 大腸閉塞にステント療法

## 保険適用から1年 症状緩和、人工肛門回避

がんの進行で大腸が閉塞（へいそく）すると、腸管内に消化液やガス、便がたまる。腹がパンパンに張り、腹痛や嘔吐（おうと）が起きて全身状態は急激に悪化する。従来、こうした患者には緊急手術が行われ、一時的に人工肛門を設けざるを得なかった。だが、緊急手術では術後の合併症の危険性が高まる。高齢などで



大腸ステントによる治療のイメージ

手術ができない患者もいる。そこで注目されるのが、筒状の金網で閉塞部を押し広げる大腸ステント。症状を劇的に緩和し、人工肛門を回避して生活の質（QOL）を向上させる。昨年一月に保険が適用され、普及への取り組みが始まった。大腸ステントは直径二センチの筒形をした形状記憶合金の網で、曇むと三・三割程度にみられる。従来は緊急手術でがんの切除と一時的な人工肛門の造設を同時に行うことが多かった。しかし、緊急手術には大量の便による手術の汚染や、全身状態の悪い患者に過大な負担を強いる心配がある。同病院は一九九三年以来、がん切除前の大腸ステ

ント留置を臨床研究として百五十例以上実施、九割超の患者で閉塞症状解消に成功したという。また、転移でもはや治癒が望めない終末期の患者や、高齢で手術に耐えられない患者も、体の負担を避けつつ閉塞症状を改善できる。

いいことづくめのようだが注意すべき点もある。まれにステントで臓器に穴が開く（穿孔（せんこう））が起きることだ。昨年十一月、厚生労働省は食道、胃・十二指腸、大腸のステントについて、国内で計五十三例の穿孔事例が発生、うち十六例が死亡したとして、ステント使用の可否を慎重に検討するよう呼び掛けた。

「大腸ステントの恩恵にあずかるには安全への十分な配慮が必要。外科と内科の協力が欠かせない」と齊田さん。自らが代表世話人を務める「大腸ステント安全手技研究会」（会員約百七十人）を通じ、安全な使用法の普及を目指していく考えだ。（共同＝赤坂達也）

▼患者の1割 東邦大医療センター大橋病院（東京都目黒区）の齊田芳久准教授によると、閉塞症状は大腸がん患者の一割程度にみられる。従来は緊急手術でがんの切除と一時的な人工肛門の造設を同時に行うことが多かった。しかし、緊急手術には大量の便による手術の汚染や、全身状態の悪い患者に過大な負担を強いる心配がある。同病院は一九九三年以来、がん切除前の大腸ステ

▼安全な普及を